

2018年3月31日発行
九州産業大学『経営学論集』第28巻第4号 別刷

デューイ「評価の理論」に含まれた価値評価の原理： 価値評価に関する研究の方向性の展望

上西聡子

〔論 説〕

デューイ「評価の理論」に含まれた価値評価の原理： 価値評価に関する研究の方向性の展望

上 西 聡 子

〔要 旨〕

価値の問題が問われるのは、何かしら不都合な状況に直面したときである。この場合、往々にして問題は解決すべき対象として見られるが、より良い状況を作り出す機会と捉えるプラグマティックな視点を提供した研究がある。それが、ジョン・デューイ (John Dewey) が1939年に発表した『(価値) 評価の理論 (theory of valuation)』である。この議論が基盤となり、価値の問題を扱う研究が欧米を中心に盛んになってきている。この研究分野では、現在進行形で理論的視座の構築が目指されている。そのため、本稿では、デューイによる(価値)評価の理論のレビューを通じて、価値の問題を扱う際に重要な視点の導出と、今後の研究の方向性を示す。

1. はじめに

IoTに見られるような技術変化の帰結のひとつに、産業分野を跨いだ事業展開がある。例えば、近年、様々なセンサーを用いて、農場や漁場のデータを収集し、分析結果を活用する「スマート農業」や「スマート漁業」が盛んに行われている。そこには、農業や漁業に関連する事業を手掛けてきた企業だけでなく、工場のデータを収集し活用する技術や経験を蓄積してきた製造業に携わる企業が参入し、異業種間の提携関係が形成され始めている。

しかし、こうした異業種が関わる取組みでは、それぞれの産業で築かれてきた価値が集合することで、価値による対立や闘争に苛まれる。この問題を乗り越えて実現する戦略的提携こそ、産業分野を跨いだ事業展開のエッセンスといえる。そこで本研究では、異業種間の戦略的提携のような多元的な価値の組織化を検討するため、その手掛かりとして、価値評価 (valuation) や価値査定 (evaluation) に関する研究 (Sociology of Valuation and Evaluation, 以下「SVE 研究」) を検討する。具体的には、SVE 研究の礎となった、プラグマティズムの代表的な研究者の一人である、ジョン・デューイ (John Dewey) の『(価値) 評価の理論 (theory of valuation)』のレビューを通じて、SVE 研究における特徴や方向性を再検討する。

2. SVE 研究が基盤とするプラグマティックな価値に対する問い

価値の評価や査定に対する注目が高まっていることは、2013年以降、Valuation Studies の発刊や、Beckert and Musselin (2013) や Antal et al.(2015) など、SVE 研究関連の書籍が相次いで発行されていることから明らかである。SVE 研究の共通した課題は、いかに価値が産出され、普及し、査定され、制度化されるかを問うことにある (Lamont, 2012, p.203)。社会の変化に伴い、価値の因習的な根拠が関係の再編成に直面する中で、価値の評価や査定が再調整され始めている (Kjellberg et al., 2013, p.14)。SVE 研究には、こうした価値の評価や査定の再調整を通じて、いかに実際に役立つ価値が修正されたり、新たに産出されるのかを検討するというプラグマティックな趣旨がある。

しかし、Valuation Studies の創刊メンバーによって執筆された主要論文 (Kjellberg et al., 2013) では、SVE 研究におけるアプローチには問題があることが指摘される (p.14)。これまで価値評価を検討する場合、哲学的なアプローチでは価値を計測する (measure) 側面が扱われず、経営科学や経済学のアプローチでは市場における価値を計測する数学的なツールが提供されてきた (Kjellberg et al., 2013, p.15)¹。この数学的なツールの提供は、価値の計測に対する過信を生み出した。例えば、メンバーの一人である Diana-Laure Arjalies は、ファイナンス市場における価値のパフォーマンスが統計的にのみ考慮されることで、価値評価の動的で手続き的な性質が見逃されてしまうため、査定方法の探索において研究者や専門家のなかでパラドックスが生じていることを指摘する (Kjellberg et al., 2013, p.15)。他にも、Susie Geiger は、価格を価値評価のメインレジームとする典型的な経済学的視点は、経済学だけでなく、マーケティング分野にも入り込み、価値の差異が金銭的な数値のみによって表されていることを指摘する (Kjellberg et al., 2013, p.15)。確かに、実際の価値評価の場面でも、オンライン上でのホテルや飲食店の格付けに始まり、いまでは様々な数学的ツールを通じた価値の数値化が当然のごとく浸透している。こうした現代の特徴とでもいふべき価値評価の場面を検討するには、数値への盲信によって、検討すべき価値評価の場面を見落とさないようにしなければならない。

しかし、数値への盲信を退けることが、すなわち数学的ツールなどの科学的手続きや価値の計測を扱うことを否定するわけではない。価値評価と科学的手続きに関しては、デューイが1939年に発表した『(価値) 評価の理論』で注目されている。このデューイの議論は、SVE 研究の発端ともされている。SVE 研究にてデューイの議論が引用される場合、「価値の名詞と動詞の違い」について言及されることが多い (e. g., Lamont, 2012; Helgesson and Muniesa, 2013)。名詞としての価値は、ダイヤモンドや鉱石のように、何かしらの物に存在する事物 (性質) を指

示する。人間が様々な諸活動を通じて、事物（性質）を価値付けた結果、そうした事物（性質）は価値と呼ばれる（Dewey, 1939, pp.4-5, 邦訳, 7-9頁）。他方で、動詞としての価値は、価値付け（valuing）や価値評価の行為を指示する。デューイによれば、この価値付けや価値評価には、「尊重する（prizing）」と「値踏みする（appraising）」という二重の意味が含まれる（Dewey, 1939, p.5, 邦訳, 9-10頁）。まず、「尊重する」という側面には、「明確な個人的関係を有する何らかのもの、すなわち、特に個人的な関係に関するあらゆる作用のように、情動的と呼ばれる一面的特性を有する何らかのものに力点が置かれる」（岩田, 2007, 90-91頁）。次に、「値踏みする」という側面には、「主として諸対象の关系的性質に関わるので、それゆえ個人的・情動的な言葉「尊敬する（esteem）」から識別された「見積もる（estimate）」の中に見出される知性的な面が同じ一般的語法の最高位に位置付けられる」（岩田, 2007, 91頁）。このように、デューイによって、価値付けや価値評価に異なる2つの作用が含まれていることが指摘された。

この指摘をもとに、Kjellberg et al.(2013) や Antal et al.(2015) では、価値付け、価値の産出（valorizing）、価値の査定（evaluating）という動詞としての価値の側面が検討されるとともに、それぞれが照射する社会的・文化的・政治的な蓄積が実際に役立つ価値として様々な存在に付与されていく、価値評価のプロセスが検討されている。ただし、デューイによれば、「結論は、言語の用法は余りに役に立たない」（Dewey, 1939, p.6, 邦訳, 12頁）。デューイは、これら言語の用法を通じて、「どちらの意味が本来的であるかということに関する基礎的な論争」（Dewey, 1939, p.6, 邦訳, 12頁）が繰り返される理由と、そうした用語の区別を取り巻く論争には意味がないということを示唆し、価値付けや価値評価に含まれる2つの作用に注目しようとしたのであった。

「尊重する」と「値踏みする」という2つの作用が含まれた、価値づけと価値評価の違いはなにか。岩田（2014）は、デューイが価値づけと価値評価を区別することで、この区別された両者の連続性を捉えようとしたことを指摘する（39頁）。価値付けが、評価される事物と他の事物との関係において情緒的な行為である一方で、価値評価は、「思考と反省に裏付けられ、事物をその諸関係において観察し比較し見積もる（測定する）判断である」（岩田, 2014, 39頁）。このように、価値付けは、あくまでも情緒的な行為であるため、その行為やそこで重んじられ値踏みされた価値を正当化する現実的妥当性がない。そこで必要となるのが、その現実的妥当性を保証する価値評価である。反対に、価値評価は、価値付けがなければ始まらない、ということも言える（岩田, 2014, 39頁）。

3. デューイの議論に含まれた価値評価の原理

では、いかに価値評価は、価値付けに対する現実的妥当性を保証するのだろうか。情緒的な行為から始まる価値評価が現実的妥当性を保証するには、まずは価値評価を検証可能にしなければならない。評価の理論を翻訳した磯野（1957）は、この理論が「価値をいかにして科学的命題として定立しえるか」という課題を解くことに焦点を当てているとする（138-139頁）。デューイは、科学的に保証される現実的妥当性に注目し、2つの重要な観点を提示している。

第一に、状況に応じた価値評価の経験的調査である。価値の問題は、ある状況のうちで、何か不都合なこと、困難、衝突、が起きたときのみ発生する（Dewey, 1939, p.34, 邦訳, 65頁；磯野, 1957, 138頁）。確かに、何も不都合がない場合、価値は問題とならない。問題が生じた場合、まずは情緒的な行為が生じ、その後、それを克服しようとする欲求（desiring）や関心（interest）が生まれてくる（Dewey, 1939, p.37, 邦訳, 70-71頁）。欲求や関心は、決して衝動的に生まれるわけでも、元来備わっているわけでもなく、それは問題を克服しようとする行動的な現象である（Dewey, 1939, p.51, 邦訳, 99頁）。ただし、直面する問題が様々であるように、そこで生じ機能する欲求や関心は状況によって異なる。そのため、「欲求や関心が生じかつ機能する実際の条件の経験的調査」（小西, 1991, 169頁）を行うことが必要となる。

こうした欲求や関心が生まれたとき、その事物を観察し比較し見積もる価値評価が行われる（Dewey, 1939, pp.51-55, 邦訳, 98-102頁；岩田, 2014, 39頁）。具体的には、「さまざまな観察的・事実的データ（事実的証拠）に照らして、それらが採用された場合に起こりうる諸結果の予測、これら予想されうる諸結果の比較、さらにはそれらのうちのどれが現存する問題の解決にとってより有効であるか」が検討される（岩田, 2014, 41頁）。こうした価値評価が行われることで、やがて価値評価に基づいた目論見（end-in-view）が形成される（Dewey, 1939, p.25, 邦訳, 49頁；小西, 1991, 172頁）。目論見は、方向付けを行う手段であり、プランとして機能する。つまり、何かしら克服しようとする状況があり、それに立ち向かう欲求や関心が生じることで価値評価が行われる。価値評価が行われれば、今度はその価値評価に基づいた目論見が形成される。このようにして、価値評価が欲求や関心の現実的妥当性を検討する行動として現れると、その行動がどのように行われるのか、その条件や結果を検証することができる（Dewey, 1939, p.51, 邦訳, 98-99頁）。

この価値評価を経験的に調査するという観点は、それまでの究極的価値（"final" value）を前提とする議論では無視されてきた（Dewey, 1939, p.56, 邦訳, 107-108頁；岩田, 2014, 42頁）。究極的価値は状況が変わっても変化しないため、価値の問題は観察対象から外され、い

かに価値が問われているのかという状況を検討するという観点は失われてきた。そのため、価値評価の検討には、価値評価という行為は、欲求や関心が生じかつ機能する実際の条件(状況)との関連で理解することが最も重要となることが指摘された(小西, 1991, 174頁)。

第二に、科学的手続きによる価値評価のコントロールである。この観点は、第一の観点と深く繋がりがあある。第一の観点では、究極的価値を置くがゆえに、価値評価が状況と切り離された形で検討されてきたことに対して、価値評価が状況依存的である限り、その状況に即して欲求や関心をそれらが生じる条件や結果とともに検証する必要性が述べられた。価値評価では、問題の克服に対する目論見はその結果とともに、予測や比較を通じて現実的妥当性を検討される。その結果が、望むに値する(desirable)場合、現実的妥当性は保証され、逆の場合は更なる探求が始まる(岩田, 2014, 41頁)。

このとき、価値評価は、データに基づいた結果の予測や比較という科学的手続きを用いることで、価値評価の命題(valuation-propositions)を獲得する(Dewey, 1939, p.19, 邦訳, 38頁)。ただし、それは科学手続きに基づく科学的命題(事実命題)(scientific propositions, または, well-grounded propositions, matter-of-fact propositions)であって、価値評価に基づく価値命題(value-propositions)ではない(Dewey, 1939, p.51, 邦訳, 99頁)。科学的命題とは「生起したり既に存在したりする事物や出来事に関するもの」であり、価値命題は「生み出されるもの」に起因する(Dewey, 1939, p.51, 邦訳, 99頁)。価値命題に基づく価値評価は、科学的手続きを用いつつも、固有の価値命題を獲得しなければならない。

この問題を解決するため、デューイは科学的命題には含まれない「手段-目的(means-ends)」関係を注視する(Dewey, 1939, p.24, 邦訳, 46-47頁)。手段-目的関係は、目的がそれを実現できる手段によって決定されることを示す(Dewey, 1939, p.41, 邦訳, 78頁)。先述したように、欲求や関心に基づいて価値評価が行われ、目論見が形成され実行される。この場合、手段が先行し、目的は既成されていない。その理由について、デューイは「焼き豚の起源についてのチャールズ・ラムのエッセイ」を例に説明している(Dewey, 1939, pp.40-41, 邦訳, 77-78頁)。豚小屋が焼け落ち、焼け跡を探しているときに、偶然に丸焼けになった豚を食べて、初めてその味を経験した人が、再びその味を楽しむために豚小屋を建てて燃やした、という物語である。この物語を通じて、デューイは、手段の機能から切り離されて設定される目的の愚かさを示す(Dewey, 1939, p.41, 邦訳, 78頁; 小西, 1991, 172頁)。豚小屋を建てて燃やすという手段から考えると、焼き豚を食べるという目的の価値は限りなく保証されない²。あくまでも、目的の価値は、使用される手段によって値踏みされなければならない(Dewey, 1939, pp.40-41, 邦訳, 77-78頁; 小西, 1991, 172頁)。

しかし、究極的価値が前提とされる科学的手続きには、データ（原因）が計算式（法則）に
入力され、結果を得るという因果関係だけが存在し、手段としての事物の適合性や機能性を値
踏みして目的の価値を計るということはない。そのため、「事実命題によって示される存在上
の因果関連を行為における手段目的関係へと組み替えるものとして価値命題が生じる」（小西、
1991、175頁）。つまり、問題を克服するための行動が実行できるように、原因と結果という問
題の状態を検討可能な（手段を値踏みする）状態に置き換える。このように手段を尊重しなけ
れば、目的の価値は決定されない。これを可能にするのが、固有の価値命題であり、価値命題
にもとづいて価値評価を行うことで、事物に対する反省（批判的）検討が可能となる。

このように、価値評価では、問題の克服を目指し、その状況の条件や結果を反省的（批判的）
に検討するため、データに基づいた結果の予測や比較（科学的手続き）を用いて、固有の価値
命題が探求される。こうした科学的手続きを用いた手段の検討によって、価値評価は価値付け
に対する現実的妥当性を保証する。価値評価の法則さえ解明できれば、望ましい結果が得られ
るように価値評価をコントロールできるようになる。デューイは、価値命題に基づく価値評価
と科学的命題に基づく科学的手続きを結び付けることで、価値の絶対化を排除し、経験的に根
拠づけられた知的なコントロールの可能性や実現を追求しようとした（小西、1991、180頁）。
その根本には、価値評価が人間の行動の絶えざる現象であり、物質の関係の知識によって与え
られる資源の使用による修正と発展が可能である、という考えがある（Dewey, 1939, pp.56-57,
邦訳、109頁）。科学手続きを用いることによって価値評価の修正と発展を通じて、我々の経験
が変革していく可能性を探ろうとしたのである（岩田、2014、42頁）。

4. 科学的手続きと経験的調査への注目を通じた研究の方向性の展望

前節で検討したように、デューイによれば、価値評価は経験的に検証可能であり、手段の検
討によって価値評価は修正され発展していく。このデューイの評価の理論を礎にする SVE 研
究では、価値評価の検証（経験的調査）とコントロール（科学的手続き）の観点がどのように
検討されているかを見ていく。

第一の観点は、多くの議論が言語的な分類を引用するなかで、デューイによる探求 (inquiry)³
の検討に注目した、デイビット・スターク (David Stark) の研究に見られる。Stark (2009)
によれば、プラグマティズム的な行為としての探求は、分析において誤った目的と手段の切り
離しという二分法を打ち砕く (pp. 8-9, 邦訳、41頁)。先述したように、目的は手段によって
値踏みされるべきであり、そのために手段としての事物は尊重されなければならない。こうし

た価値や手段の探索は、価値評価が生じる状況（問題が発生した場合）に生じる。この状況は、問題の解決ではなく、より良い状況をもたらすために新たな価値や手段を探索する機会となる。このときの探索活動は、探求の典型的な方法である（Stark, 2009, p.2, 邦訳, 29頁）。デューイは、問題が発生する状況に、不確実性に満ちているがゆえの可能性を見ている（Stark, 2009, p.2, 邦訳, 29頁）。

実際にどのように不確実性に可能性が見出されているかという探索活動を分析するにあたり、Stark（2009）では次の2点に注意が払われている。第一に、状況に応じた価値評価の経験的検証であり、価値評価が文化的環境とともに分析される。第二に、不確定な状況にける価値評価が対象とされ、予測不能な状況こそ、当然と思われてきた事物が認識される状況であるため、研究者が問題を発見する。こうした研究の成果として、スタークは、それぞれの状況で培われてきた複数の価値評価基準が混在することで、摩擦（friction）や不協和（dissonance）が引き起こされ、それが新たな価値の産出を招くイノベーションの可能性に注目する⁴。

第二の観点は、SVE研究のなかで主流となりつつある、評価装置（valuation devices）に関する議論に見られる。価値の計測ツールや定量的評価への注目が増大するなか（Orlikowski and Scott, 2013; Kornberger et al., 2015）、大学のランキング（Espeland and Sauder, 2007）、漁獲割り当て（Holm and Nielsen, 2007）、ショッピングカート（Cochoy, 2008）、ユーザー生成コンテンツ（user-generated content）（Baka, 2015）、評価装置の影響が作り出される物語（Hauge, 2016）など、様々な評価装置による価値評価の変革が検討されている。第一の観点で注目したスタークも、消費者によるオンラインの格付けが、価値基準を記録する新たな手段として台頭していることを検討している（Stark, 2011, p.327）。オンラインの格付けは、消費者の実際の価値付けにおいて、どのような事物が重んじられ、値踏みされているのかという価値を計測するデータソースとして新たに提供されている。このように、評価装置は、既存の社会技術的なアレンジメントに位置付けられることで、単に価値付けに影響するだけでなく、何を数えるか、何に価値があるとするか、といった、より価値評価の根本的な部分にも影響を与える（Dussauge et al., 2015）。

何を数えるか、何に価値があるとするかという、より根本的な問題に取り組むため、Latour and Lepinary（2009）では、計測基準（measures）や度量衡（metrics）など、新たな価値を計測する機器（valuemeter）の必要性が論じられている（p.16）。これらは量化可能であるが、価格で表される必要はなく、オルタナティブな度量衡をなしている（Stark, 2011, p.327）。今後、何に価値があるとするかに関して、新たな計測基準や度量衡を開発することが課題となっていく（Stark, 2011, pp.327-328）。

このようにSVE研究では、状況に応じた価値評価の場面を経験的に検証し、科学的手続きによって引き起こされる価値評価の変遷に注目した研究が進められている。このとき、デューイの議論を振り返れば、価値評価を研究するときに注意すべき事項が思案される。それは、科学的命題への価値命題の滑り込みや、価値命題同士の争いである。このことは、実際の価値評価の活動において、事実と価値が絡み合うように存在することを否定するものではない。価値評価に関する研究では、往々にして評価手法の開発や策定に焦点が置かれるが、その際に思索的背景となる、科学的命題や価値命題の理論的な区別が意識されているとは言い難い。ただし、現実での混在を、そのまま理論的にも混在したまま議論を進めてしまえば、そもそもの価値命題が見失われてしまうことになる⁵。

もし価値命題が見失われてしまえば、たとえ状況を踏まえた経験的研究が行われ、価値の付与や測定が検討されていたとしても疑問が残る。つまり、単に経験的な調査を行えばいいというわけではない。科学的手続きに注目すると、いかにして多様な価値が、実際に役立つ価値の付与や測定につながるのかという価値命題が置き去りにされがちになってしまう。科学的命題に基づく科学的手続きが用いられることで、いかに価値命題に基づく価値評価が修正され発展されてきたのかを経験的に検討していかなければならない。言い換えれば、Fourcade (2011)で指摘されるように、「どのように」行われた(行う)のかにだけ注目するのではなく、同時に「なぜ」行われたかを問うことで、異なるロジックに依拠する多元的な価値の影響を検討することができるのだろう。それによって、いかに価値評価の発展(イノベーション)が価値命題同士もしくは科学的命題への価値命題の滑り込み(価値評価)の争いによって生じているのかを検討することが可能となる⁶。

5. 終わりに

本稿では、SVE研究の礎となったデューイの議論を再検討し、SVE研究が、価値評価を通じて価値の修正や変遷を捉えようとする、プラグマティックな問いを基盤としていることを検討してきた。以下に、これらの検討を踏まえ、今後の研究課題を述べる。

理論的検討として、価値評価の争いを検討する方向性が見出される。価値命題の争いについては、2つの研究のレビューが必要となる。一つ目は、決着がつかない価値と価値の争いを「神々の闘争」と呼んだ、マックス・ウェーバー(Max Weber)を基盤とするFriedland and Alford (1991)やFriedland (2012)による制度ロジックス(institutional logics)の研究である。二つ目は、価値と価値の争いはコンヴァンションによって解決できるとする、Boltanski and

Thévenot (1991) の研究である。制度ロジックスと価値体系の議論は、価値評価について異なる視点から論じており、SVE が取り組むべきアジェンダとして指摘されている (Beckert and Aspers, 2011; Lamont, 2012)。

第二に、経験的検討として、複数の価値評価基準が混在する状況を考察する方向性が見出される。そうした状況の代表として、異業種間の戦略的提携が挙げられるだろう。近年では、IoT などのテクノロジーの導入や法の改正、自然環境の変化などによって劇的に変化しつつある、農業や漁業に、技術的専門性をもって参入する製造業との間での戦略的な提携関係が増加しつつある。そのなかで注目するのが、評価基準と計測機器の存在である。それらには、製造業で長年に渡って蓄積されてきた独自のデータが用いられる。新たなデータを蓄積する際には、そのデータ蓄積に用いられた評価基準や計測機器が用いられている。つまり、同条件を設定しない限り、評価に必要なデータは得ることができない。このとき問題となるのは、いかに独自の経験を、他者にとって役立つように変えていくのかということである。経験は、科学的手続きを通じて数値化することで、自社の価値を他社にも理解可能な形へと変換することができる。ただし、単に経験を数値化したとしても、それが他社にとって役に立たなければ意味がない。いかに経験の数値化が実際に役立つ価値として成り立つのだろうか。経験の数値化という科学的命題への価値命題の滑り込みが実践ではどのように利用され、多元的な価値の組織化へと繋がっているのか、その側面を捉えていきたい。

【付記】

本研究は JSPS 科研費26780234, 16H03679の助成を受けたものです。

参 考 文 献

- Antal, A. B., Hutter, M., and Stark, D. (eds.) (2015) *Moments of Valuation: Exploring Sites of Dissonance*, Oxford University Press.
- Baka, V. (2015) "Understanding Valuing Devices in Tourism through Place-making," *Valuation Studies*, Vol.3, No.2, pp.149-180.
- Beckert, J. and Aspers, P.(2011) *The Worth of Goods: Valuation and Pricing in the Economy*, Oxford University Press.
- Beckert, J. and Musselin, C. (2013) *Constructing Quality: The Classification of Goods in Markets*, Oxford University Press.
- Boltanski, L. and Thévenot, L. (1991) *De la Justification: les économies de la grandeur*, Gallimard. (三浦直希訳『正当化の理論：偉大さのエコノミー』新曜社, 2007年。)
- Cochoy, F. (2008) "Calculation, Qualculation, Calculation: Shopping Cart Arithmetic, Equipped Cognition and the Clustered Consumer," *Marketing Theory*, Vol 8, Iss.1, pp.15-44.

- Dewey, J. (1939) *Theory of Valuation (International Encyclopedia of United Science, Vol. II, No.4, the University of Chicago Press.* (磯野友彦 (訳) 『評価の理論』 関書院, 1957年。)
- Dussauge, I., Helgesson, C. F., and Lee, F. (2015) *Value Practices in the Life Science and Medicine*, Oxford University Press.
- Espeland, W. N. and Sauder, M. (2007) "Rankings and Reactivity: How Public Measures Recreate Social Worlds," *American Journal of Sociology*, Vol.113, No.1, pp.1-40.
- Fourcade, M. (2011) "Cents and Sensibility: Economic Valuation and the Nature of 'Nature'", *American Journal of Sociology*, Vol.116, No.6,
- Friedland, R. and Alford, R. (1991) "Bringing Society Back in: Symbols, Practices, and Institutional Contradictions," in W. W. Powell and P. J. DiMaggio (eds.), *The New Institutionalism in Organizational Analysis*, The University of Chicago Press, pp.232-263.
- Friedland, R. (2012) "Book Review: P. H. Thornton, W. Ocasio and M. Lounsbury (2012) *The Institutional Logics Perspective: A New Approach to Culture, Structure, and Process*," *Management*, Vol.15, No.5, pp.583-595.
- Hauge, A. M. (2016) "The Organizational Valuation of Valuation Devices: Putting Lean Whiteboard Management to Work in a Hospital Department," *Valuation Studies*, Vol.4, No.2, pp.125-151.
- Helgesson, C.F. and Muniesa, F. (2013) "For What It's Worth: An Introduction to Valuation Studies," *Valuation Studies*, Vol.1, No.1, pp.1-10.
- Holm, P. and Nielsen, K. N. (2007) "Framing Fish, Making Markets: The Construction of Individual Transferable Quotas (ITQs)," in Callon, M., Millo, Y. and Muniesa, F. (eds.) *Market Devices*, Blackwell Publishing Ltd., pp.173-195.
- 磯野友彦 (1957) 「解説」『評価の理論』 関書院, 130-144頁。
- 岩田浩 (2014) 「経営倫理学と事実／価値二分法の問題」『経営情報研究』第22巻, 第1号, 33-45頁。
- Kornberger, M., Justesen, L., Madsen, A. K., and Mouritsen, J. (2015) *Making Things Valuable*, Oxford University Press.
- Kjellberg, H., Mallard, A., Arjalies, D. L., Aspers, P., Beljean, S., Bidet, A., Corsin, A., Didier, E., Foucade, M., Geiger, S., Hoeyer, K., Lamont, M., MacKenzie, D., Maurer, B., Mouritsen, J., Sjogren, E., Tryggestad, K., Vatin, F., and Woolger, S., (2013) "Valuation Studies? Our Collective Two Cents," *Valuation Studies*, Vol.1, No.1, pp.11-30.
- 小西中和 (1991) 「デューイ政治哲学研究序説：思想形成過程試論」『滋賀大学経済学部研究叢書』第19号, 1-202頁。
- Lamont, M. (2012) "Toward a Comparative Sociology of Valuation and Evaluation", *Annual Review of Sociology*, Vol.38, pp.201-221.
- Latour, B. and Lepinary, V. A. (2009) *The Science of Passionate Interests: An Introduction to Gabriel Tarde's Economic Anthropology*, Prickly Paradigm Press.
- Orlikowski, W. and Scott, S. V. (2013) "What Happens when Evaluation Goes Online? Exploring Apparatuses of Valuation in the Travel Sector," *Organization Science*, Vol.25, No.3, pp.868-891.
- Stark, D. (2009) *The Sense of Dissonance: Accounts of Worth in Economic Life*, Princeton University Press. (中野勉・中野真澄 (訳) 『多様性とイノベーション：価値体系のマネジメントと組織のネットワーク・ダイナミズム』 マグロウヒル・エデュケーション, 2011年。)
- Stark, D. (2011) "What's Valuable?," in Beckert, J., and Aspers, P., (eds.) *The Worth of Goods: Valuation and Pricing in the Economy*, Oxford University Press, pp.319-338.

注 釈

- ¹ Kjellberg et al.(2013) は、一般均衡論の失敗が社会学に計測的価値 (measured value) の議論を復活させると同時に、道徳的価値 (moral values) や経済的価値 (economic value) に関するより精緻化された分析をさせるようになったことも指摘する (p. 15)。
- ² 往々にして、手段の現実的妥当性は、その手段が目的を達成するために適しているかを問うことで獲得されると考えられている。確かに、焼き豚を食べるという目的から考えると、豚小屋を建てて燃やすという手段は目的を達成している。だが、手段の観点から考えると、その方法は他の手段と比較した結果として選択されている。このようにはじめて馬鹿らしく妥当性は限りなく保証されない (Dewey, 1939, pp.40-41, 邦訳, 77-78頁)。
- ³ 岩田 (2014) も、デューイの議論は「プラグマティックな探求 (不確定な状況を確定した状況に統制され方向づけられた仕方に変容させること)」の理論的枠組みのなかで展開されていることを指摘する (41頁)。
- ⁴ ただし、摩擦はよくない結果も引き起こすため、不協和を組織化する (organizing dissonance) ことが強調される (Stark, 2009, p.27, 邦訳, 70頁)。
- ⁵ こうした問題提起を行ったデューイの議論は、価値評価の理解に対する横やり運動 (flank (ing) movement) (Muniesa, 2011, p.25; Stark, 2011, p.335) と評されている。
- ⁶ Fourcade (2011) は、無形物に金銭的価値をつける場合、「どのように」行われたかだけでなく、「なぜ」行われたかを問うことで、文化や国家ロジックが、いかに装置の作用や組み立てに影響するのかを検討することができる。